審 査 の 結 果 の 要 旨

論文提出者氏名　Adriana Shima Iwamizu Rezelman

本論文の主なる目的は中国・上海におけるオープンスペースの観察を通して，大都市の変容過程の一例を論じ，さらにはその一般化に関する知見を得ることにある．都市内のほとんどの空間には計画者と利用者が存在する．それぞれの意図と行動とは長い時間をかけて非同期に行われ，そういったコンテクストの蓄積した全体のもとに現在の都市空間が現象することになる．ここで特に「オープンスペース」はその多くが公共的アクセスが可能であり，利用者の行動が空間のあり方により強く反映されうる都市空間の種別であると考えられる．本論文では多様な歴史的・文化的背景をもち，かつ人々の空間に対するイメージを行動を通して観察されうると考えられる上海のオープンスペースに注目することによって都市変容の様相を描き出そうとしている．

論文は３章で構成されている．

第一章はイントロダクションとして，研究の背景，オープンスペースを通してみるメトロポリスの概念，また逆に，メトロポリスという文脈におけるオープンスペースの意義に関し論じている．また本論文の方法と仮説について簡潔に説明し，論文の構成について述べている．

第二章は「メトロポリスへと向かう上海の発展」と題し，1) 歴史，2) 中国における「伝統と近代」の葛藤，3) 都市開発・計画論 の三つの異なる視点から，上海のオープンスペースを記述している．

1) 歴史: 歴史的事実を背景とし，各オープンスペースを時系列的に説明している．ここではまず各オープンスペースの位置，形態，機能，使われ方を理解するのに必要な背景知識を提供することを目的としている．

2) 伝統と近代の葛藤: 中国または上海における「伝統と近代」論争を分析することにより，政治，経済，文化，科学，およびテクノロジーを含む広範なイデオロギー上の議論からの建築や都市の形態的な面への影響の記述が試みられる．例えば，バンドのヨーロッパ調の建物，ロンタンに適用された混合様式，いくつかの庁舎建築にみられる中国式装飾への偏愛，などが説明され，将来開発の方向性に示唆を与えている．

3) 都市の開発・計画論: 現在進行している上海のオープンスペースの変容過程から，a) 70 年代の Henri Lefebvre による社会学的な関心，b) 80 年代以降の Manuel Castells による情報工学の都市への影響，c) 90 年代における建築家レム・コールハースの都市計画に関するアイディア，の 3 者を例として都市の人間性・社会性，と物質性・構築性とを相互に対比させながら論じている．

第三章は本論文の中核的な部分である．ここでは前章における上海オープンスペースの定性的分析との対比を目的として定量的な分析が試みられている．

上海のオープンスペース 40 例のそれぞれに関し，オープンスペースの設計時における機能，および実際の利用実態とに関する，18 のカテゴリーデータを用意し，それらに対して数量化Ⅲ類を適用している．解析結果からは 40 例のオープンスペースの意味論的空間布置が得られているが，これらが明瞭な 4 つのクラスター（以下，Cluster-I～IV）を生じることを発見している．同時にその布置空間の主要 2 軸がそれぞれ「伝統性 vs. 近代性 軸」，「多義的利用 vs. 慣習的特定目的利用 軸」と解釈可能なことを見出し，このことも手がかりしながら各クラスターの内在的性質，およびその布置全体からみた上海オープンスペースの構造を論じている．例えば，Cluster-I に属するすべての事例は，諸外国に譲渡されていた時期，あるいはもっと以前の時期に結びつけられる起源を持っており，1980 年代以降の近年に作られたオープンスペースはどれもこのクラスターには属していない．これらのオープンスペースは都市に望ましい特有の歴史的性格を付与する貢献をしているものと考えられている．

また「伝統性 vs. 近代性 軸」の性質に関しては中国における伝統的な都市居住形式 ロンタン(Longtang 弄堂，上海においては Lilong 里弄とも）の分布を例に示されている．ロンタンを含むオープンスペースは Cluster-I，II，IV に属している．それらの構築自体は混合伝統構造を持つ(Cluster-II)か，あるいは新しい近代的要素をまじえた形式(Cluster-I，IV)であるにも関わらず，依然として「伝統的」と考え得ることを今回見出した布置が示している．

一見矛盾するような例として，上海で最も長い歴史を持つオープンスペースであるにもかかわらず，寺院が，「伝統」よりも「近代」に近い Cluster-III，IV に含まれていることがある．この理由は，寺院に商業機能，観光に関する機能や，ジンアン寺のそばの地下鉄駅のように新しい交通機能などが付加されたことによって，説明されうるとする．

以上要するに，本論文は大都市の変容過程という多次元で複雑な事象の理解にむけて，空間の計画者側とその利用者側とを並列に論じようとしているところにそのユニークさを見出すことができる．社会情勢を含めた計画者側の状況は主に第二章で文献的に整理され，定性的に解釈された．一方，それに利用者側の要素を加えて行われた上海オープンスペースの統計的分類からは，第二章で単純に示された事象が現実都市の中で利用者の行動を通して観察すると，必ずしも整合的に現れないことが見て取れ，その理解のためには新たな多次元的視座が必要であることが述べられ，試みられている．

上海という伝統と開発のレベルの最も複雑な地を対象としたこと，オープンスペースという利用者の意識行動を反映しやすい空間単位を選択したこと，さらに手法として，十分な文献探査と統計的処理を融合させ，前述のような弁証法的論考を行うことによって複雑な現象の記述に成功している．論文全体がより一般的な「大都市の変容過程」を探究する方法についての新たな示唆となっている点でも本論の意義は大きい．

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる．